

# サイエンスコミュニケーター だより

Volume 12, March, 2020



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや 200 名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

## サイエンスコミュニケーターの声

### 師匠はウンチとお客様

私は、動物園で飼育係をしている。担当動物は、ヒツジのなかまムフロンド。私の大切な仕事に、ウンチの観察がある。毎日、ウンチをみて、動物の体調を知り、エサを考える。ウンチは、為すべきことを教えてくれる“師匠”だ。

“師匠”は他にもいる。お客様だ。ムフロンドの展示場でお客様の声を聞いていて、私はある問題に気づいた。ムフロンドを“ウシ”と勘違いする方が多かったのだ。その原因は、掲示物だった。ムフロンドの紹介パネルには、“ウシ科”と書かれている。これを見た方が、「ムフロンドはウシ」と勘違いしていたのだ。ややこしいが、ウシ科にはウシだけでなく、ヒツジやヤギも含まれている。だから、“ウシ科”というだけでは、その動物が何のなかまかは、実はわからないのだ。そこで私は、「ムフロンドはヒツジ」という解説を増やした。お客様もまた、為すべきことを教えてくれる“師匠”だ。日々、私はこうやって、密かにお客様と“対話”している。

#### 「解説、読まない」問題

しかし、解説があればムフロンドはヒツジだと十分に伝わるわけではない。なぜなら、多くのお客様は解説を読まないからだ。解説があっても、ムフロンドはときどきウシやヤギに間違われている。

2017 年、上野動物園にいたとき、この問題に挑戦した。特設展示「ハペペ博士の研究所 - あしのナゾ -」を制作したときのことだ。展示のテーマは、両生爬虫類の手足。水中から陸上へと進出した動物は、驚くほど多様な手足を進化させた。それがよくわかるのが現生の両生爬虫類だ。この展示では、両生爬虫類が手足を獲得した不思議を伝えたいと考えていた。そこで、展示がどのように利用されているかを知るために、前年の特設展示を見ているお客様を観察した。すると、やはり多くの方は解説を読んでおらず、展示メッセージがあまり伝わっていない印象だった。

#### 解説をやめる

そこで、“ハペペ展”では、解説をやめた。代わりに、架空の人物“ハペペ博士”が、両生爬虫類の手足に取り憑かれている様子を展示にした。自宅でカエルやトカゲを飼いまくり、寝食も忘れて観察するハペペ。思いついたことを、ところかまわず書いてしまうハペペ。ハペペの異常なまでの両生爬虫類への執着ぶりを、ひたすら展示にした。人は、何かの虜になる人を見ると、その人や、その人の関心ごとに興味をそそられるのではないかと、というのが狙いだった。公開後、お客様がハペペ宛てに寄せて下さったカードには、「足って何であるんですか？」「(ハペペは) どうしてこんなことをしらべてるの？」と書かれていた。ハペペや、両生爬虫類の手足に関心を寄せて下さった方がいたと嬉しく思った。

#### “対話”の先に

ウンチに、お客様に、私のサイエンスコミュニケーションは、師匠たちとの“対話”から始まる。“対話”を重ねると、相手への理解や関心が深まり、新しい発想や原動力が生まれてくる。動物園の使命のひとつに、「野生動物との共存」がある。絶滅に瀕するライチョウや、増えすぎたシカなど、難題ばかりだが、人々との“対話”の先に、この課題の解決の糸口も模索してみたい。



ムフロンド



解説のない特設展示「ハペペ博士の研究所」の様子

#### 齊 當 史 恵

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了 (11 期)。害獣と言われている野生のシカが気になってシカたない飼育係。多摩動物公園勤務。

## 活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、夏にサイエンスコミュニケーター養成実践講座のプログラムの一部として実施されたトークイベントと、秋に SCA の総会で行われたパネルトークの様子をご紹介します。

### 「伝えたい」トークから「聞きたい」トークへ

#### 2019 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その① (2019 年 8 月 7, 8 日開催)



ディスカバリートークでの一番の気づきは、自分が「伝えたい」ことを相手に「聞きたい」と思ってもらうためにどう工夫するかということでした。私の研究テーマは魚の多様化メカニズムの遺伝子レベルでの解明ですが、そのまま話すと専門的で近寄りがたいものになってしまいます。そこで、今回のトークではその先を「聞きたい」と思ってもらえるよう、展示を活用しつつ、魚の多様化がほかの生物より進んでいる点にフォーカスし、あえて専門的な話も盛り込みました。受け手に関心を持ってもらえる切り口を突き詰めて考えたことで、改めて自分の研究を見直す機会になりました。(SC 講座 14 期修了生 藤崎 花美)

### 「壊れ方」で考える安全

#### 2019 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その② (2019 年 8 月 7, 8 日開催)



私は建築物の壊れ方と安全性の関係について紹介しました。建物の安全性の指標としてよく聞くのは「強度」ですが、実はただ壊れにくければ安全なのではなく、「壊れ方」も重要です。発表には模型を使用したので、お客さんの視線が模型に集まり、臨場感あるトークを行うことができたと思います。また、自分のトークはもちろん、他の人のトークを聞くことも通して科学について語りあうことの楽しさを再発見しました。今後もサイエンスコミュニケーションに関わっていくとともに、自分の研究についても深めていきたいと思っています。

(SC 講座 14 期修了生 中江 百花)

### 「サイエンスコミュニケーション」は何を生むのか？

#### 科博 SCA 総会特別企画としてパネルトークを実施しました (2019 年 9 月 14 日開催)

社会と科学の間をつなぐ取り組みであるサイエンスコミュニケーション。科学への親しみを引き出したり、科学者との対話の場を作ったり、科学の関わる議論を促したりと、科博 SCA 会員の中でも様々な活動が行われています。

今回、それぞれの活動に共通する思いを探り、サイエンスコミュニケーションの役割や意義について改めて考える場を設けようと、科博 SCA 総会に合わせて特別パネルトークを実施しました。

パネリストは、それぞれ別々の領域（博物館職員、お笑い芸人、大学教員、フリーランスのサイエンスコミュニケーター）で活躍する方々。

- ・サイエンスコミュニケーションは科学者の味方か？
- ・サイエンスコミュニケーションは富を生むのか？
- ・サイエンスコミュニケーションは社会を豊かにするのか？



これらの問いを起点に、サイエンスコミュニケーションの現状や将来について会場全体で意見を交わしました。

サイエンスコミュニケーションはまだ、社会全体からも科学者コミュニティからも十分に知られておらず、職業として確立もしていない。介在したいところに介在できず、市民と科学者の対立にもどかしい思いをすることもある。

こうした現状の悩みが語られる一方、異なる分野の人同士の協力を生んだり、民主的な意思決定を経て技術を社会に取り入れれたりしていく上で、科学リテラシーや異分野間コミュニケーションを扱うサイエンスコミュニケーションの知見はますます力を発揮していこうという見立ても。また、サイエンスコミュニケーションは社会に「豊かさ」の指標を増やす活動でもある、といった見解も語られました。

それぞれの活動から生まれるものがある、活動し続けていくことでますます社会に良いものを生んでいこう、と会員間で熱い思いを共有しあう機会になりました。

(SC 講座 9 期修了生・科博 SCA 副代表 杉山啓)